

# 3

## 多世代・他の社会的弱者も包括する支援で互恵社会を

地域には多様な素晴らしい活動が多く根づいていることに気づかされます。活動をしている人は、自分達が楽しむことで満足をしていて、素晴らしさに気づいていないこともあります。また、活動に行き詰まりを感じているケースもありますが、すぐ近くに参考となる活動があるので、お互いに知らないこともあります。

新しく何かを創っていく発想とともに、今ある地域の財産を活かしてつなげていくことが、より豊かな地域につながる可能性もあると思います。

- ① 多世代・他の社会的弱者も包括する支援に向けて
- ② 地域の課題を積極的にマッチングで解決する
- ③ 認知症の人もいっしょに社会貢献を
- ④ 求められるのは“コーディネートの力”
- ⑤ 対話を通じて、互恵社会を創る



### ① 多世代・他の社会的弱者も包括する支援に向けて

“るべき”ではなく“あったらいいな”を形にしていく

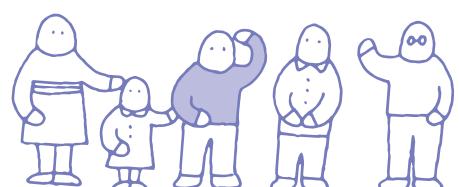
支援の場の発想は、目の前の困っている人を何とかしようとする発想です。“認知症に必要な支援”ではなく、“その人の困り事”的解決策を考えるというボトムアップの発想です。人・家族は地域でつながって生きていますので、認知症に限定する支援では、目の前の困り事に十分に対応することができないのです。

地域には、認知症者・高齢者、障がい者、子どもの支援を包括的に実施している拠点が活動しています。話を聞きすると、最初から全てを“るべきだ”という発想ではなく、地域の困り事に対応していく中で、自然に包括的になっていったということです。目の前の課題に対して、“あったらいいな”と思うことを、一つひとつ、形にしていったという積重ねですので、自然な連携があります。

包括的な支援の場では、認知症の人・他の社会的弱者の人にも、“支えられる側”から“支える側”に回るチャンスも生まれます。得意なことと、不得意なことが互いに異なりますので、不得意なところを補いあいつつ、得意を活かして協力していくこともできるのです。

また、地域をフィールドに農業・教育など異分野との連携も最近は注目されてきていますが、愛知県の各地では、すでに多様な試みが行われ、地域にはすでに多くの拠点が動いています。

先進の拠点に学び、連携していくことで、さらに多くの場・拠点が地域に生まれ、ネットワークも広がっていくことが期待されます。地域社会とは活動のネットワークの集積で、その広がりが力になっていきます。



## ② 地域の課題を積極的にマッチングで解決する

### 課題を資源にする発想を

地域の住民・高齢者・障がい者・子どもが集まる場を活用して、地域の課題を積極的に解決する可能性も考えられます。商店街の空洞化・空き店舗の増加が問題となっていますが、商店街の中心に精神障害・認知症のグループホームを作り、市民が利用できるフリースペース、食堂を併設（就労継続支援A型事業所）することで、商店街の活性化につながっている成功例があります。また、空き家の増加に対して、学生を安い家賃で住まわせて地域の高齢者とのふれあい・支援につなげる試みも広がっています。耕作放棄地の増加に対しては、デイサービスで畠を借りて生産活動に従事し、産物は配食で活用するという試みもあります。買い物難民の増加に対しては、スーパーがバスで地域を回って、住民にも喜ばれ、スーパーの収益もあがっている例があります。少子化で学校の教室が空いたところを地域住民が活用することで、自然に生徒とのふれあいが生まれ、学校に馴染めない子が地域住民の集まりに“登校”し、大人とのふれあいで立ち直って、また教室に戻ることもあったということです。

課題を個別に解決しようとするのではなく、組み合わせの発想で、課題が地域資源となる可能性があります。大切なのは、“課題”を問題として、“解消する”発想ではなく、課題の中に可能性を見いだしていく発想です。これは、認知症の人に対する見方にも共通すると思われます。“できないこと”に注目をして、できないことを訓練でできるようにするのではなく、“その人のできること、得意なこと”をどうすれば“活かしていくのか”という発想です。



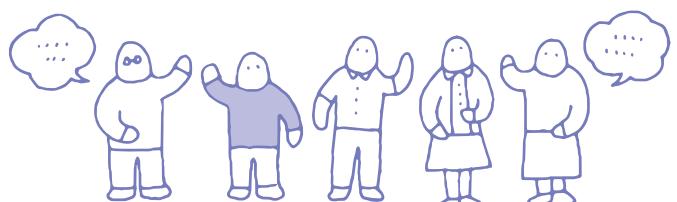
## ③ 認知症の人もいっしょに社会貢献を

### 多様な人の協働・参加で、地域は豊かに発展していく。

なぜ、“地域おこし”“まちづくり”は楽しく、夢が語られるのに、“認知症の人を地域で支える”という話題になると、負担感が先に来るのでしょうか？地域に住む多様な人達といっしょに暮らしていくこと、ご近所づきあいは楽しい方が良いのではないのでしょうか？“認知症”が絡むと、負担をどう分散していくのか、ということがテーマとなり、いっしょに楽しい地域を作っていくういう話にならないのは、なぜでしょうか？“認知症の人の地域参加を歓迎する”ということは、“いっしょに楽しみを見つけていく”ということではないのでしょうか？

認知症の人もその人のできることに注目をすると、ケアの場に留まるのではなく積極的に役割を持って、社会貢献をする可能性を見つけられることもあります。“認知症の人を支えること”のみではなく、“認知症の人も、いっしょに地域に参加する”という発想の転換も有効と思われます。認知症の人も、適切な支援があれば、地域活動に参加していくことができます。認知症の人をケアする、支えることを目的とするのではなく、認知症の人と目的を共有して協働する支援で、認知症の人の可能性が広がっていき、地域社会も心豊かになる可能性もあります。

認知症の理解を若い世代にも求める啓発活動が奨励されていますが、その活動に加えて、若い世代の活動にも参加をしていく“双方向”が、相互理解のために必要なのではないでしょうか。眞の理解、特別視の解消は、場を共有し、協働していく中で生まれていくものであり、接することなく、抽象的な文言を覚えても、眞の理解にはつながりません。“地域”というプラットフォームで、さまざまな活動に多様な人達が協働・参加していくことで、地域は豊かに発展していくと思われます。



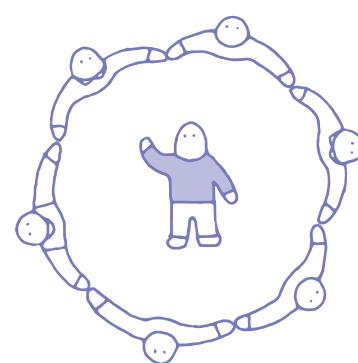
## ④ 求められるのは“コーディネートの力”

人との関係性を調和させ、和で力を生み出していく。

今、認知症支援に求められるのは、コーディネートの力と考えています。これまで、いかに個人のケアをしていくのか、ケアの技術が求められていました。しかし、認知症の人は、“ケアを受けるだけの人”ではありません。個人として、人と関係性を結び、その中で生きていく主体です。人の関係性の中で、その人の得意を活かし、意欲を尊重し、他の人にできることを見つけていくというコーディネートの力が求められていると思われます。認知症の人も、対応する相手、周囲の環境・場の状況により、発揮する力が大きく異なることは、しばしば経験されることです。

“調整力”というと利害の調整のイメージがありますので、ここでは、あえて、“コーディネート”といいます。このコーディネートの力とは、場の目的・活動を理解し、参加者それぞれの意思を確認し、得意・不得意を的確に評価し、目的達成への最適解の組み合わせを考えた上で、それぞれの人の自己決定を支援し、場をまとめていく能力です。

認知症ケアは、ある症状に対して、対応する接し方があるというハツツーではありません。その人と向き合って対話で創り出していく関係性です。これは一対一で“正解”のあるハツツーを暗記する、ということでは対応できません。複数の人との関係性を調和させていくことにより、和で力を生み出していく能力です。参加者が楽しみつつ活動を持続させている場は、このコーディネートの力を持つ人が、それぞれの人の話に耳を傾けつつ、全体を調和させているように感じます。



## ⑤ 対話を通じて、互恵社会を創る

ボトムアップの力の集結が求められていく。

互恵社会は、政策でできるものでもなく、また、固定したものでもなく、参加者・地域の状況に応じて、つねに変化しつつあるものです。対話を通じて、関係性を維持していく他はありません。ボトムアップの力の集結が求められていくのです。

“あつたらいい”と思う地域を中心において、では何ができるのかを考えていく、認知症の人に対しても、抽象的な“認知症支援”を中心に置くのではなく、具体的なその人の参加のあり方を考えていくことが、ご本人も、周囲も活かしていくと思われます。

認知症の増加は、社会の脅威として語られることが大半です。認知症の介護が、家族に大きな負担となり、地域へも影響していく可能性は、否定はできません。また、潤沢な公的資金を投入していくことも、次世代への負担を残すことも否定はできません。ただ、悲観論を言うだけでは、何も変わりません。公的資金には限界があること、認知症の介護は経済的・心理的・身体的負担が高いという現実を直視し、客観的に評価し、その上で、最善の前向きな解決策を考えていくことが、今、求められています。社会的弱者を切り捨てるのではなく、何ができるかを考えていく先に、幸せな社会が見えてくると思います。

回答はありませんし、見つかるかはわかりませんが、まず、現実をしっかり認識して、今すぐに、できることからはじめて、歩きつつ考えていけば、見つかるかもしれないと思っています。その時に、認知症の人も含めて、参加者が楽しむことが、何よりも大切と考えています。

